
次元戦記ディスガイア 暴君の使い魔と並行次元の旅

江玖糸亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元戦記デイスガイア 暴君の使い魔と並行次元の旅

【Zコード】

Z7238U

【作者名】

江玖糸亜

【あらすじ】

少年が目を覚ますとそこは牢獄の中だつた。

そこで出会つたとあるプリニー教育係とその仲間たち。

そこは『地獄』という『アクター・レ大統領』と呼ばれる悪魔が治める魔界の最下層であり死者が罪を償う場であった・・・・・・

この物語は二ヶ月後、少年がいつも通り仲間たちと共に『时空の渡し人』に転移を頼んだ時、突如暴走した『时空の穴』に飲まれとする次元世界へ飛ばされたところから始動する

(注、物語が先に進んでから新たに原作が増えことがあります。)

プロローグ（前書き）

最初は出会いの場面からです。

プロローグ

「…………んっ？」

薄暗い独房の中、一人の少年が目を覚ました。

「…………」

周囲には見覚えのない景色。というより少年は牢屋の中に入ったこと自体が初めてだったので見覚えなどあるはずもないのだが。

「…………え～っと」

少年は自分がどうしてここにいるのかを必死に思いだそつと頭をひねった。

と、何者かの足音が響いてくる。

「…………つか。フンシリッヒよ」

「はっ。」この者がそうです。ヴァル様

少年は姿を見せた二人の男を観察した。

一人は黒いマントに黒い髪で赤い目と発達した犬歯が異様に似合っている青年だった。

もう一人の男は長い銀髪に赤いジャケットを羽織った金色の瞳をした細身の筋肉質の青年だ。

「ふむ……」

黒い方の青年が少年をじつくつと観察し始める。

「……確かに、随分と珍しい波長の魂だ。これではどのブリーチの皮にも合つまこ」

黒い青年は一人で納得したように頷いている。

「いががなさいましょ。ヴァル様。このままにしておいても勝手に消滅すると思いますから放置するべきだと愚考致しますが？」

「却下だ。フンリッヒよ。確かに倉庫にブリーチの帽子が余っていたはずだな？」

黒い青年の言葉に銀髪の青年は肯定の言葉を返す。

「はい。しかし閣下。まさかとは思いますが

」

「無論。ここに送られてきた以上、俺にはこの小僧を立派なブリーチにする義務がある」

黒い青年はマントで身をくるむ。

次の瞬間、黒いマントを大きく翻しながら青年は叫ぶ。

「やつひー！ ブリーチ教育係としての使命感が俺の心を熱く滾らせているのだつたま」

「その本来の自分を完全にお忘れになつてゐるにもかかわらず、堂々とした立ち振る舞い……このフーンリッヒ、改めて闇下の恐るべき能力に感服いたしました。」

褒めているのか馬鹿にしているのかよくわからぬことを言つた銀髪の青年は黒い青年に深々と頭を下げた。

「では闇下。倉庫にプリニー帽子を取りに行つて参ります」

「うむ。頼んだぞフーンリッヒ」

銀髪の青年は黒い青年の言葉を受けるとそのままどこかへと歩き去つて行つた。

「小憎。名は何と申す？」

「……ミナト・アサギリ」

事の成り行きを沈黙を持つて見つめていた少年は黒い青年の不意の問い合わせに冷静に答えた。

黒い青年は満足したよつて首を縦に振ると。

「喜べ。俺が貴様を一人前のプリニーにしてやる」

「…………」

少年は黒い青年が何を言つてゐるのかわからなかつたので沈黙するしかなかつた。

「……一つ聞いても良いですか」

「なんだ」

「……トイレットペーパーですか」

「……」

黒い青年は少しの間、黙考^{黙考}してから口を開く。

「……フンリッヒが戻ってくるまで待て」

プロローグ（後書き）

最初は主人公とあの二人しか登場しませんでした……
次は三ヶ月後、転移したところから始める予定です。

第一話 次元転移しました。（前書き）

「こちらの方は休日などで時間があるときに続きを投稿したいと思います。」

とこりわけて次元転移してしまった後から始まります。

第一話 次元転移しました。

「…………えーっと……」

壊れたビルと瓦礫^{がれき}に囲まれた廃墟^{がれき}。

黒いプリニー帽をかぶつた少年
ようにな見覚えのない風景に途方に暮れながらどうして自分がここに
いるのかを思い出していた。

あの日、地獄で目覚めてから三ヶ月。

最初のころは地獄での生活やヴァル閣下の教育で大変だったが一週
間ほどしたら慣れてきて、ヴァル閣下にも良く褒められたものだつ
た。

「お前は俺が教えたプリニーの中で最上位のプリニーになるかもし
れんな」

とすら言われた。

そんな地獄での日々を過ごしていたのだが、今日ヴァル閣下たちと
いつも通り訓練のために『时空の渡し人』に訓練場まで転移させて
もらおうとした時、突如『时空の穴』が暴走してヴァル閣下たちと
共にいざこかへと転移させられたのだった。

「そりだつ……！ みんなはー？」

ミナトは慌てて仲間を探し始めた。

「ヴァル闇ト～ツー！ フンツカツー！ 風祭～ツー！ デス
ツ～ツー！ アルティナ～ツー！ ハツツー！」

大きな声で叫んでも返事は返つてこない。

「まつたくもう～。みんなどこ行つたんだよ～」

悪態をつきながら近くの小石を蹴飛ばした。

飛んで行つた小石は何かにぶつかった。

「……んつ？」

何かがじりじりに振り向く。

「ジラゴン～、じりじり～んなどう？」

話し掛けるも答えは無く砲^{ボルト}を上げながらジラゴンは突撃してきた。

「うわ～とー？」

ミナトはジラゴンの突撃を大きく上に跳んで避ける。

ジラゴンはそのまま壊れたビルに頭からぶつかりビルの崩壊に巻き込まれた。

「……う～ん……」

崩落したビルに飲み込まれたジラゴンを見ながらミナトは首を傾げ

た。

今のドーラゴンは魔界では見たことのない種だった。

(新種かな……それともそもそもドーラゴンじゃないのかな……)

「ミナトつちやん」

考え込んでいたミナトに遠くから近づいてくる聞き覚えのある声が一つ。

「無事だつた『テス』ね。ミナトつちやんー。」

「『テス』ー。」

現れたのはラスボスを目標して修行中の異形の少女。

人の手によつて作られた人造悪魔。正式名称『最終兵器D E S C O』だった。

「ミナトつちやん。お姉さまや他の皆さんを知りませんか?」

「『テス』も知らないの?」

ミナトの返答に『テス』は肩を落とした。

「ところとせミナトつちやんも一人『テス』か……つ、お姉さま…

…」

「大丈夫だよ『テス』。僕たちがこうして無事だつたんだからみんな

もきっとどこかで僕たちを探しているよ

「ミナト、ちがわよ……」

ミナトの励ましの言葉に、テスコは少しだけ元気を取り戻す。

「そこまでだつ……」

当然、空から聞き覚えのない幼女の声が響き渡つた。

「誰が幼女だつ……！」

虚空に向かつて叫び声を上げる幼女。

「ちつ……まあいいか……そこのてめえら、不法に次元転移を行つた容疑が掛けられているんだ。一緒に来てもうりつぜ！」

機械仕掛けのゲートボールスティックの様な物をこちらに突き付ける赤い幼女の命令口調にミナトはどう反応すればいいのか判断に困つた。

「むつ……ラスボスに戦いを挑むとはい度胸、テスね……」

対して、テスコは臨戦態勢。

その様子を見た赤い幼女も手に持つたゲートボールスティックの様な物を肩に乗せた。

「素直に従う氣はねえ見てえだな……」

明らかに敵意のこもった視線でミナトはビックリすれば穩便に済ませられるかを悩み始めた。

と。崩落したビルの中から瓦礫を押しのけてドラゴンが姿を現す。

「あつ。」

「とこいつ間にドラゴンは赤い幼女を飲み込んだ。

……

赤い幼女を飲み込んだドラゴンは怒り狂った赤い瞳をこちらに向ける。

……

「うわ、怖いデス～！」

「デスコロナトの後ろに隠れた。

どうやら先ほど強気だったのは相手の見た目が怖くなかったからのみたいだ。

そしてミナトは。

「……見逃して、くれませんか？」

無駄とわかりきつていながりドラゴンに詫いてあるミナトの言葉を最後まで聞かずドラゴンはミナトに体当たりを仕掛ける。

ミナトは溜め息をつきながら剣を取りだした。

戦いが、始まる

「デス！」ラスボスを田舎しているのなら「アハハ」とまで鬱えち
やいけないよ？」

「だつ、大丈夫デス。誰もビビってなんていないデスつ！」

ミナトの後ろから出ようともしない「デス！」の言葉にミナトは苦笑し
た。

第一話 次元転移しました。（後書き）

ヴィータ食われる。油断でもしていたのでしょうか……

次回、最初の戦いです。

第一話 幼女と戦闘に入りました。（前書き）

ドリームはすぐに終わつますが、題名通りあの幼女と戦います。

第一話 幼女と戦闘に入りました。

瓦礫がれきを蹴散らしながら突撃してくる怒り狂つたドラゴン。

そしてミナトの後ろには『テスコ』がいる。

ならば。ミナトは『テスコ』に声を掛ける。

「『テスコ』 魔チエンジ」

「はっ、はい『テスコ』！」

ミナトと『テスコ』は一瞬のうちに大きくジャンプして空中でクロスした。

次の瞬間にはミナトの手には禍々まがまがしい形の二股ふたまたの剣が握られていた。

魔剣『テスコ』。

それは魔物型キャラが持つ特性『魔チエンジ』を使い、剣の姿となつた『テスコ』だった。

「行くぞ」

二股の刀身が左右に開き中から巨大な光の刀身が姿を現した。

ミナトはそれを水平に構えて。

「でえやつー！」

掛け声と共に思いつきり横に薙ぎ払つた。

『魔剣バルムンク』

魔剣『デスコ』を用いた必殺技の一つだ。

光の刀身は驚くほどスムーズにドラゴンを切り裂き、悲鳴を上げることなくドラゴンは上下に体を分離させて絶命した。

その直後、光が消え開いていた刀身が再び閉じて行く。

この間わずか数秒程度の出来事だつた。

切断された胴体から噴水のようすに血が吹き出る。

と、いきなり胴体の一部が動き出した。

「まさか……まだ生きているのか……！？」

警戒しつつデスコを構えなおすミナト。

だがその心配は杞憂に終わった。

うごめいていた胴体の一部が破裂し、中から血で真っ赤になつた幼女が姿を現したからだ。

「ふうーつー！ ふうーつー！」

真っ赤な幼女はドラゴンとは比べ物にならないほどすさまじい眼力

でミナトを睨みつけていた。

だが暴君ヴァルバトーゼの元、数多くの悪魔、天使、魔神、魔王との戦いをくぐり抜けてきたミナトにとっては取るに足らない視線だった。

「てめえ……あたしをドラゴンに食わせてドラゴンとあたしを切るつとするなんて、随分とセコイまねしやがるじゃねえか……！」

ヴィータの大きな誤解にミナトは首を横に振った。

「違うよ。僕は

「言ひてえ」ことがあるんなら牢獄の中で勝手に言つんだなつ……！」

その牢獄からここに来たんですけど。

ミナトの心の言葉など聞こえるはずもなく真っ赤な幼女はゲートボーラスティックを振りかぶつてミナトに襲いかかる。

「……はあ。仕方ないな」

幼女と戦うのは気が引けるミナトだったが、降りかかる火の粉は払わなければならぬ。

振り下ろされるゲートボールスティックをテスコで受け止める。

ぶつかり合つての魔力に周囲の瓦礫が吹き飛んだ。

「つー？」

鍔迫り合いの最中、幼女は『デスコ』に宿っている禍々しく強大な魔力を肌で感じ取っていた。

(こいつ……！？ 危険だつ……！…)

幼女は先走つてここに来てしまった自分の迂闊さを呪つた。

それと同時に、もうすぐここに来る仲間たちを危険にさらすわけにはいかないという強い思いが幼女の中に生まれた。

幼女は『デスコ』をはじくと空を飛んでミナトから大きく距離を取つた。

「アイゼンッ！…」

『ラケー・テン・フォルム』

幼女の叫び声に呼応するかのよう^{ひきつ}にゲートボールスティックから音声が発せられ、空薬莢^{からやくとう}の様な物がゲートボールスティックから出て行くと同時にその形を変えていく。

ゲートボールスティックのハンマー部分の片方がスパイク、もう片方はロケットの推進機構へと変形した。

ミナトは知りえなかつたことだが、それはゲートボールスティックもといグラーフアイゼン強襲形態『ラケー・テン・フォルム』。

射撃が行えなくなるなどの多少の欠点はあるものの、一対一の個人戦においては『打撃武器』として極めて高性能な形態だ。

「あたしの名はヴィータっ！　『鉄槌の騎士』ヴィータだつ……」

赤い幼女　　ヴィータは名乗り声を上げた。

「てめえの名はっ……」

問われたミナートは思わず苦笑した。

「てめえ……！……なに笑つてこやがるつ……」

「「」ねえ、「」めん」

ミナートには真っ直ぐで純真な幼い騎士を名乗りの姿が滑稽であるように感じられた。

だがそれと同時に

「僕の名前はミナート・アサギリ。君みたいに一つ名を付けるなら、『暴君の使い魔』とでも名乗ればいいのかな。」

「暴君っ……！？」

ヴィータは戦慄した。

使い魔。ところが今は主がいる。

少なくともここつまどこの使い魔を呼びだせるとこつことは相当な魔導師であることは容易に想像できる。

「ああ。それと一つだけ言つて良いかな

「ああっ！－！ なんだっ！－！」

考えているときに声を掛けられ、思わず凄みのある声を出したヴィータを意に介さずミナトは先ほど思ったことをそのまま口に出す。

「僕は君みたいな娘は結構好きだよ」

「はあっ！－？ なっ、なに言つてんだてめえっ！－？」

ミナトの言葉に更に真っ赤になるヴィータ。

「もつ、もつじいっ！－！ 考えるのはめえをぶつ潰してからだつ！－！」

ヴィータがアイゼンを大きく振りかぶる。

「ラケーテン……ハンマーッ！－！」

叫びながらヴィータはアイゼンのロケット推進の力を借りて回転しながらミナトへ突撃していった。

ミナトは『魔剣バルムンク』でそれを迎え撃った。

再び二つの魔力が激突した。

「「Jの魔力はつ……！？」

ぶつかり合う二つの強大な魔力を感じ取った少女たちは速度を上げてそこへ向かつた。

第一話 幼女と戦闘に入りました。（後書き）

果たして次回で決着が着くでしょうか？

オリジナル主人公設定（前書き）

とりあえず主人公の設定だけご紹介します。

オリジナル主人公設定

ミナト・アサギリ

年齢 不詳（外見年齢十五、六歳）

趣味、特技 家事全般、家事全般

容姿 年相応の背格好で自覚は無いが異性にモテる美少年。

髪の色 黒色

瞳の色 黒色

クラス 暴君の使い魔

得意武器 拳、剣、銃

固有技

ブリニー 連鎖爆撃

見習い？なのに先輩方を爆発させるのはやめましょう。

殺劇の舞い

美しい舞いですね。一重マルです。

ファミリアカタストロフ

暴君の使い魔を名乗るのならこれくらいできませんと。

汎用技

拳 碎破金剛掌まで習得。

剣 魔陣大次元断まで習得。

銃 コキュートスまで習得。

魔ビリティ

固有 ブラッドサーヴァント

効果 ヴァルバトーゼが共に戦闘に参加していた場合、全能力が二十パー セント増加。フーカが戦闘に参加していた場合は二十五パー セント増加。（二人ともいた場合、五十パー セント増加）

汎用 1、プリニー見習い？ 2、忘却の少年

効果 1、人間型キャラから受けるダメージを五十パー セント増加、魔物型キャラから受けるダメージを五十パー セント減少。（機械などは魔物型に分類する。ただし戦闘機人やクローンは人間型に分類。）

2、通常攻撃及び特殊技に状態異常『忘却』（特殊技、魔法の使用不能）を付加。この効果は高確率で発動し、状態異常にならないボスキャラにも有効。なお、デバイスは武器、固有スキルや固有IS、（インヒューレントスキル）は魔ビリティに分類される

ため使用可能。

特殊な魂の波長をしているため合つたプリニーの皮が無く、黒いプリニー一帽をかぶることによつて実体化している記憶の無い少年。覚えているのは自分の名前だけだったので特に違和感なく地獄で生活していた。語尾に「つす」を付けないのは「自分はプリニー以下の半人前プリニーですからプリニー心得に従うのはまだ早いと思います。」とのこと。この言葉だけでのヴァルバトーゼを説得してみせた。

時期的には本編が終わってしばらく後くらいにヴァルバトーゼたちと出会つた。

またフーカのことが異性として大好きである。

しかし最初に会つた時に「フーカ。」と呼び捨てにして、「初対面なのに呼び捨てするなっ！」と怒られて以降「風祭。」と呼んでいる。

ミナトにとつての仲間たちの位置づけは

ヴァルバトーゼ 尊敬すべき主かつ忠誠を誓つた人。

フーカ 大好きな異性。

フェンリッヒ 仲間。

エミーゼル 兄弟子（ヴァル閣下に鍛えられた人として慕つてゐる。）

デスコ（将来的な意味として）妹。

アルティナ 閣下の大切な人。

アクターレ アホ。

となつてゐる。

そのためヴァルバトーゼに忠誠を誓っているが、優先順位はフーカ、ヴァルバトーゼ、アルティナ、デスコ、エミーゼル、フェンリッヒ、（越えられない壁が一百二十枚ほど）アホターレとなっている。

三ヶ月の間に家事全般が非常に得意となつており本人も楽しんでいる。

ちなみに多数の異性から好意を向けられるが本人はフーカ一筋なので気付かない朴念仁な一面もある。

魔ビリティーはいつでも変更可能で、現在装備している魔ビリティーはブラッドサーヴァントと忘却の少年の一いつである。

そして彼の携帯袋には多数の武器とお菓子、そしてヴァルバトーゼ用のイワシが詰め込まれている。

オリジナル主人公設定（後書き）

こんな感じです。反則的な強さです。

レベルの方はあえて明確化しませんでした。

では本編の方はゆつたりと行きたいと思いまますので、長いお待ちください。

第三話 僕対ワーランディー（前書き）

題名は適当なので気になさらなくていいでください。

ぶつかり合う二つの魔力。

「ハハああああああ——」

ヴィータが渾身の力を込めて光の刀身を打ち碎こうとする。

その方に少しすこ後方に下がるやね!!!おまけ

(強し……！)

ミナトは見かけからは想像もつかないほど強力な力と魔力を持つたヴィータを心から賞賛した。

一方、ヴィータもミナトの力に驚愕きようがくしていた

（まさかあたしの全力をあんな涼しい顔して受け止めるなんて…）

ヴィータはミナトに脅威と同時に何故か強い尊敬の念を抱いた。
きょうい

(……) これが犯罪者でなけりやあ、はやてが部隊に誘つたかもな

もしくは自分がはやてに推薦していただろうつか。

馬鹿な考えを振り切るかのようにヴィータは更に押し込むように魔力の出力を上昇させる。

!

「？」

とうとうヴィータの一撃に耐えきれなくなつたミナトははじき飛ばされるように後方へ飛んで行きビルに激突し、その衝撃で崩れたビルの瓦礫の中に飲み込まれた。

「あつ」

ヴィータは呆けた表情でミナトが飲まれた瓦礫を見つめ、一瞬後に

「うへ、うべりーー 犯罪者となへ死なせんわナにまーかねえ

飛びながらヴィータはアイゼンを上段に構えてから振り下ろし、削さく岩機の様に瓦礫を破壊する。

だがヴィータはそんなことをする必要はないと言ふことにとつた。

「つ！？　アイゼンツ！！」

『パンツァーシルト』

突き出されたヴィータの手の平から三角形の魔力の盾が生じる。

次の瞬間、とてつもない熱氣を帯びた炎とそれと比例するかのよつに冷たい冷氣を纏つた吹雪が瓦礫を吹き飛ばした。

ヴィータの盾はその余波を防ぎきつたが、直撃していたなら耐えられたかどつかわからなかつた。

改めて戦慄するヴィータをよそに、瓦礫を吹き飛ばした際に生じた煙の中から一つの人影が姿を現す。

「助かつたよ。ありがとうデスコ」

「いえいえ。これくらいどうつてことないデスよ」

そこにはミナトともう一人、先ほど見かけてどこかに消えてしまつた変な格好の少女がいた。

そのかわつミナトの手にあつたはずの不気味な剣が消えている。

（どうなつてやがる……！？）

魔チョンジのことを知らないヴィータが混乱するのは無理のないことだった。

「あつ。//ナト//せん。あの生意氣な幼女が睨みつけているデス

よ」

やつ言いながらデスコせミナトの後ろに身を隠した。

「デスコ。あの娘はヴィータって名前がちゃんとあるんだから呼ばないと」

「ヴィータつちさんデスか。了解デスつ！」

「てめえらつ……ふざけてんのかつ……！」

「ひよわつ！？ 怖いデスつ……！」

いい加減しごれを切らしたヴィータの怒声にデスコはミナートの背後で丸まつて震え始めた。

「デスつ。さつきも言つたけどラスボスを目指すのならこれくらいのこじでじじつていちゃ駄目だよ」

ミナートは優しくデスコに諭した。

「そつ、そつデスつ！ デスコはラスボスになるんデスからこんなことでぐじけちゃ駄目デスつ！」

デスコは再び臨戦態勢を取ると精一杯ヴィータを睨み返す。

「さつ、さあ来るデスつ！ お前なんかケチョンケチョンにやつづけてやるデスつ！」

強がるデスコをヴィータは静かに睨んでいた。

(…あの変なガキ……すつげえ魔力を感じる……)

怒りながらも冷静な分析を続けるヴィータには騎士としての確かな
貫禄があつた。

「ちよつと待つて。『デスコ』」

ミナトは本郷にちよつとずつヴィータに近づいて行く『デスコ』を呼び止めた。

「なつ、なん『デスカ』ミナトちさんつー『デスコ』はラスボスになるための修行として今からヴィータちさんと戦おうと

「じめんね『デスコ』。いまはヴィータとは僕が一対一で闘っているんだ。だから

「

「ほえ?」

急に言葉を止めたミナトに『デスコ』が見つめながら疑問の声を上げる。

その時スローアイングナイフが三本ほどミナトに向かつて飛来して来た。

「うわあつー なん『デスカ』ー?」

驚く『デスコ』を尻間にミナトは素手で三本とも受け止める。

それが狙いであることに気が付かず。

「おこミナトつーーー 今すぐそこつを遠くへ投げ捨てつーーー」

「つーー?」

ヴィータの言葉にミナトは瞬時に反応してナイフを遠くへと投げ飛ばす。

瞬間

ナイフが爆発した。

「……どうこいつもりだ。ヴィータ。」

「……チング……」いつはいまあたしと一対一で闘つてんだ。邪魔するんじやねえ

「……それはすまない。だが今は容疑者の確保が最優先だ」

「……ちつ

その言葉に良い反論が思い浮かばず、しぶしぶ納得するヴィータ。

そこに現れたのは眼帯を付けた灰色の髪の小さな幼女。

みんなの頼れる姉ことチング・ナカジマだった。

「チング姉っ！ 待つてくれよっ！…」

「置いてくなんて非道いっスよっ！」

更に現れる二人の少女。

ノーヴ・ナカジマとウーンディ・ナカジマ。

個性にあふれた三人の戦闘機人が戦列に加わった。

「……この世界は女性主流の社会なのかな……？」
ヴィータたちを見て何となくそう思ったミナトであった。

第三話 僕対ヴィータその一（後書き）

ナンバーズ登場。

さて一対一を邪魔されたミニナートはどうするでしょうか。

それと不定期ではありますが、龜にはなつなさそなうなのでキーワードから亀更新を排除しました。

第四話 じゃあね、バイバイ。（前書き）

逃げます。

第四話 じゃあね、バイバイ。

「よし。それじゃあ逃げようか！」スコ

「ええっ！？ ミナトつちわんつ！… 突然何を言いく出すんデスか
つ…！」

ミナトの提案に「スコは驚きの声を上げた。

ミナトは「スコの言葉に返答せずに静かに、ヴィータたちを観察する。

「くくえんつ！… わたはあたしらの登場に恐れをなしたつスねつ
！」

何もしていなじウエンティの言葉はシッ！」から入れてもうえなか
つた。

「ちよつ！？ みんな非道いつスつ！ 何か言つてほしいつスつ！
！」

「いわせえつ！ 静かにしてやがれつ！」

「ノーグンつ！ もううひつと優しくシッ！」んでほしいつスよ
つ…！」

漫才を始めるノーグンとウエンティを無視して、ヴィータとチングは
油断なくミナトと「スコの挙動を観察していた。

（ヴィータ。彼らはどういう戦い方をしていた？）

（ガキの方はわからねえがあいつは変な形の剣を使ってやがった。
あれがあいつのデバイスだと考えると魔導騎士タイプに間違いねえ。
それもかなりの使い手だ）

念話を飛ばして会話をするヴィータとチング。

（だがデバイスが剣だというだけでは魔導騎士とは限らないだろ？
？）

（確かに。だが普通の魔導師があたしの全力の一撃を受け止めら
れるなんて考えられねえ）

（受け止めたっ！？ ラケーテンフォルムの一撃をかつ！？）

チングの顔が！^{きょうひがく}驚愕の色へ変わった。

（とにかく。あいつもあのガキも油断できねえ相手だ。気を抜くん
じゃねえぞ。チング）

（ああ。お前の全力を受け止めた相手となれば油断なんてできるは
ずが無い）

警戒心を更に強めるヴィータたちをじつへつと眺めていたミナトが
口を開く。

「……考えてみたんだけどね」

ヴィータとチングの警戒心が強まる。

「！」の場で彼女たちと戦つ理由が僕たちには無いって思つたんだ

（それに一対一の闘いに水を差されちゃつたし）

ミナトは内心で残念そうな溜め息をついていると、隣にいたテスコが反論する。

「でつ、でもラスボスは逃げられないテスよつ！！」

「大丈夫だよテスコ。確かにラスボスからは逃げられないけど、ラスボスは逃げていいいんだから」

間髪いれずに返された言葉に。

「なるほどテス～。ラスボスは逃げても良いんテスね。メモメモ…」

納得しながらメモを取り始めた。

苦笑しながらその姿を眺めていたミナトは改めてヴィータたちを見やる。

「それじゃあヴィータと……ええとそいつの人は

「……チenkだ。チenk・ナカジマ」

名乗るべきかどうか数瞬考えたチenkだつたが、ヴィータの名前を知つてになると、ヴィータは名乗つたということなので自分も名乗ることにした。

「チンクさんですね。僕たちはこれからはぐれた仲間たちを探しに行かなければなりませんから、これでお別れです」

ミナートの言葉を最後まで聞かず、ヴィータがミナートへと口ケット噴射を利用した回転をしながら高速で突撃する。

先ほどと同じすさまじい破碎の一撃にミナトは。

「逃げますよ」

携帯袋から取り出した銃をヴィータへ向けた。

驚くヴィータとチンクを尻目に銃を構えたままミナトは後ろに大きく跳躍した。

「逃がすかよっ！」

回転しながらもヴィータは軌道を変えてミナトへと追撃する。

「
残念」

ミナトが引き金を引くと明らかに銃そのものよりも大きな機械が飛び出した。

「んだとつ！？」

ヴィータとミナトの間に現れた機械に、ヴィータは軌道を変えること
が間に合わず機械に全力の一撃を叩き込んだ瞬間

中に内蔵されていた誘導弾が爆発した。

「ヴィータッ！？」

大きな煙が周囲を覆い尽くしている中、チングは爆発に飲まれた、ヴィータの元へ向かう。

（まさか質量兵器を隠し持っていたとは……！？）

予想もしていなかつたことにチングは戸惑いながらもヴィータを捜索し続ける。

「ヴィータッ！……どこだつ……返事をしろッ……」

声を張り上げるも一向に返事が無い。

やがて徐々に煙が晴れしていく

「…………」

一点を見つめたままボロボロになつたヴィータが浮いていた。

「ヴィータッ！ 大丈夫かつ！」

「……ああ」

服があちこち焼け焦げ、肌も火傷やけどと出血をし、機械を破壊したアイゼンと両腕もボロボロだったがそれでもヴィータは一点を見つめたまま動かない。

「…………どうした？」

「…………あの野郎…………あたしのことなんて眼中にありやしなかつたっ…………！」

全力で闘つた自分に対して相手はそもそも自分を見てすらいなかつた。

実際にはミナトは確かに全力を尽くしていなかつたが、手を抜いていたわけではないしヴィータのことを強い娘だと認めていた。

それでもそう感じたヴィータは憤怒ふんぬの形相あよなわけでミナトがデスクを引っ張つて逃げて行つた一点を睨み続ける。

「…………絶対にあたしの手でぶつ倒してやるつ…………！」

ヴィータが何故ここまで怒つているのががチンクにはわからなかつた。

だが実はヴィータ自身も何故これほど怒りを感じているのかがわからずに戸惑つている自分がいることを自覚していた。

「だから違つて言つてんだろつ……」

「そういう問題じゃ無いっスつ……」

ちなみにこの一人はずっと漫才を繰り広げており、後でチンクにこつてりしまられたのは言うまでもないことだった……

第四話 じゃあね、バイバイ。（後書き）

あの時、ミナトが使ったのは銃の汎用技の一つである『クラスター・ランチャー』という技です。

第五話 女の人しかいないのかな？（前書き）

ヴィータたちから無事に逃走できた様です。

第五話 女の人しかいないのかな？

「ミナトちやん。これからどうする？スカ？」

ヴィーダたちから全力疾走で逃げてきたミナトたちは廃墟から遠く離れた森の中を歩いていた。

その森はそれほど深くは無く、日の光が良く届くも涼しさを感じるやかの森だった。

「ん~……そうだね、やっぱりヴァル閣下や風祭たちを探そうか」

「でも……みんなどこにいるのかもわからん『スカ』よ？」

「やつなんだよね~……ほんとどうひつつか……」

ミナトが歩きながら悩み始めると、腹の虫が鳴った。

「……おなかすいた『スカ』

ただし『スカ』の。

「う~ん……困ったな……食料は持ってきてないし……」

携帯袋（お菓子とイワシ入り）を見ながらつぶやくミナト。

と、ミナトは人の気配を感じ取った。

「ちよつと待つてね『スカ』。誰かいるみたいだからちよつと食料

をわけてくれないか訊いてくるよ

「はいテス。期待してるテスよ。ミナトつかれりつー。」

ミナトは「テス」の声援に苦笑しながら森の中を進む。

しばらく進むと川が流れていた。

とてもきれいで澄みきつた川で水遊びをしている複数の人影があつた。

ミナトは気配を消しながら隠れて様子をうかがつた。

「あははっ！ ヴィヴィオ～。食らえ～っ！」

「わあっ！？ やつたな～っ！ お返しだよリオっ！」

「わふっ！？ くそ～っ！ もつ一回だ～っ！」

可愛い水着姿で水を掛け合つ活発そうな一人の少女と笑いながらそれを見つめる大人しそうな少女。

「ヴィヴィオ～っ！ そろそろお風だよ～っ！」

「早くしないとこの馬鹿スバルが全部食べちゃうわよ～。」

「ふへへふわふははっ！？」

バーベキューをやっているらしい母親らしきサイドボーンの女性や付きそいらしきロシングヘアの女性とその他にも複数の女性の姿が。

ちなみに全員水着姿。

小屋がいくつあるところを見ると、キャンプ場か何かである「う」とがわかった。

（もしかしてこの世界って女性主流どころか女性しかいないのかな
……？）

今のところ女性にしか会っていない「ミナ」はそう思った。

「はーいっ！ わふうつ！」

「あはははははっ！ 油断大敵だよっ！ ヴィヴィオっ！」

再び水の掛け合いを始める二人の少女。

大人しそうな少女は苦笑しながらも大人しくサイドポニーの女性の元へ。

「ヴィヴィオっ！ 早くしないと本当にスバルが全部食べちゃうよ～っ！」

「あっ、ちょっと待ってなのはママっ！ リオっ！ 勝負はお預けだよっ！」

「わかったっ！ また後でやろうねっ！」

一人の少女が急いでサイドポニーの女性の元へ向かっていく。

「ヴィータさんたちも来てほしかったですね」

「仕方ないよ。休暇の日程が合わせられたのは私たちだけなんだか

『

完全にオフになっている彼女たちは、ヴィータたちが遠くの廃墟にいることを知らない。

ヴィータたちも旅行に行くとは聞いていたが、彼女たちの行き先までは聞いていなかった。

（わい……どうしようかな。）

ミナトは隠れながら思考を巡らす。

（このまま出ていけばのぞき魔扱いされそうだな……『デスク』には悪いけど、誰もいなかつたってことで済ませよう）

ミナトは音を立てないように静かに去っていく。

だがそれを許さないのがこの世の捉。

『マスター』

「どうしたの？ レイジングハート？」

『あの木の向こう側に誰かいます』

「えつー?』

驚きの声を上げながらミナトがいる方向に視線を向ける女性たち。

（……やっぱり、のぞきはばれる運命なのかな……）

心中で反省と溜め息をつくミナトは森の中を駆け出した。

「みんなっ！ のぞき魔を捕まえるよっ！ ……」

「 はいっ！ ……」

返事の数は三人だったがミナトは先ほど確認したときはもつと多かつた。

ミナトは全力で「テスコ」の元へと駆け出し、すぐに「テスコ」の元へ戻つたのだが。

「ええっと……それで君はいつたい……」

「だから「テスコ」はラスボスなの「テスっ！ パパが造ってくれたんデスっ！」

「……造った？ 君はまさか……」

「テスコ」の元には一人困り顔をした同じ年くらいの男物の水着の上に白いパーカーを着た赤毛の少年がいた。

（ちゃんと男もいたんだ）

少しだけ安心したミナトは追われているという事実を思い出し一人の会話に割つて入る。

「『テス』。早くここを離れるよ」

いきなり現れたミナトに『テス』も赤毛の少年も驚愕きよくがくの表情を浮かべる。

「ミナトちやんっ！ そんなに急いでどうした『テス』かー…？」

「……君がこの子の保護者なの？ ちょっと詳しい話を聞かせてほしいんだけど」

「そんなことより今は早くここから」

「見つけた」

ミナトが言葉を言こ終わる前にミナトの頬を魔力弾がかすめる。

「のぞき魔クン。ちよつと頭、冷やせつか」

背後から感じる強大な魔力に『テス』は震えていた。

ミナトは作り笑顔を浮かべて口ハーツでどうにか誤魔化すために振り向

「待つてください。なのはやん」

「うとしたミナトを手で制しながら赤毛の少年が口を開いた。

「ヒリオ？ ヒリしたのかな？」

「」の二人は今日「」に招待した僕の友人です。先ほどよつやく來たので「」で話をしていました

「なのははさつ！ のぞき魔はつ！！」

他の女性たちも集まつてきた。

「畠さん。実は

」

赤毛の少年が堂々とした態度で嘘を並べる。

女性たちは納得していない顔をしながらも反論の声を上げる者はいなかつた。

（……助かつた、のかな？）

ミナトはなぜ少年が自分をかばつたのかわからなかつたが、とりあえず安堵しておくことにした。

「……後でいろこの聞かせてもらひつよ

誰にも悟られない様に小声で言つてきた赤毛の少年にミナトは小さく頷いた。

第五話 女の人しかいないのかな？（後書き）

ミナトはフーカ一筋ですので、水着美女などでは興奮しません。

それとエリオですが、ぶっちゃけ性格が原形を留めていませんので
ご了承ください。

第六話 ただいま情報交換中です。（前書き）

えーっと、Hリオ君の性格は原形を留めておつません。

中身は完全にオリジナルキャラ化しておつますのでその辺りのことはもう承くだせ。

第六話 ただいま情報交換中です。

「……なるほど」

簡単な自己紹介を済ませた後、ミナトとテスコはエリオに連れられて防音機能の備わった小屋の中でこれまでの事情を説明した。

なのはたちも話しを聞こうとしたがエリオの説得によつてしぶしぶ外で待機することとなつた。

「人に造られた最終兵器。死人の使い魔。暴君と呼ばれた魔王……」

エリオはいま聞かされたことのキーワードを口に出して言った。

「とっぴょうし突拍子もない話だからね。信じられないのは無理もないよ」

「でもテスコたちは嘘なんかついてないテスツ！！」

ミナトとテスコの言葉にエリオは頷いた。

「これでも人を見る目はそれなりにあるつもりだからね。君たちが嘘を言つていないことぐらいはわかるよ、それに僕の中にいるアイツも君たちは嘘を言つていないつて言つてるしね」

（……アイツ？）

ミナトはエリオの言葉に疑問を抱いたが口には出さなかつた。

「信じてくれるんテスツ！ ありがとうテスツ！ エリオっちはさ

んつー」

「え、エリオつか……」

「デスコにやう呼ばれたエリオは多少引きついた笑みを浮かべた。

「それでエリオ。」この世界のことについて教えてほしいんだけど」

「やうだね。君たちも知つておいた方が良さそうだ」

エリオはミッションのことをミナトたちに説明した。

「……おかしいよね。それ」

説明を聞き終えたミナトが最初に発した言葉がそれだつた。

「特にその「バイスとかいう武器についている非殺傷設定だつけるのつける必要性は眞無だと思つんだけど」

「やうデスコ！ 戦いには犠牲がつきものだつてヴァルちゃんやお姉さまが言つてたデスコ！」

一人の怒りがにじみ出でている言葉を聞きながらエリオは苦笑した。

「やうだね。戦いには必ずリスクが必要だ。正直、僕も非殺傷設定なんて必要ないと思つよ」

「それじゃあエリオつかさんは「バイスを持ってないんデスか？」

「デスコの質問にエリオは自分の腕時計を見せた。

「これが僕のデバイス。だけど非殺傷設定は取り外してあるんだ」

「？ そんなことして大丈夫なのか？ 管理局のルールじゃ非殺傷設定は必ずつけるものだつて」

「うん。完全な違法デバイスだよ」

エリオは笑いながら言った。

「そつ、そんなことして大丈夫なんデスかっ！？」

「……このデバイスは僕の覚悟の証でもあるんだ」

エリオは過去を思い出すように空中に視線を移した。

「覚悟？ いつたいどんな覚悟を決めているんだ？」

「……勝ちたい奴がいる」

ミナトの問いにエリオの目が鋭くなつた。

「ひえっ！？」

デスコは鋭くなつたエリオの視線を防ぐようにミナトの後ろに隠れる。

「初めてあいつと闘つた時、今まで感じたことのない高揚感に包まれたんだ。師匠に鍛えられていた時でも感じなかつた楽しさ。もう何度も闘い続けたのかもわからないけど、僕らは今も闘い続けている」

エリオは鋭さの中に親しみと憧れ、そして若干の嫉妬の混じった複雑な目で遠くを見つめる。

「最初は僕の力についてこられなかつたストラーダが破壊されて僕の負けに終わった。次に闘つた時はストラーダを強化改造して僕の力について行けるように強化したから僕が勝つた。だけどその次会つた時はあいつは更に強くなつて僕が負けた」

エリオは子供のように実に楽しそうに延々と勝敗について話し続けた。

(宿命のライバルってところかな)

ミナトはそういう相手がいるエリオのことを少し羨ましく思つた。

「…………それで次会つた時は今度こそ決着をつけようつて言つたんだ」

「ふわあ…………すごいんデスね…………」

エリオの話を聞き入つていたデスコが感動の息を漏^もらした。

「もつとも、もう何回田の約束になつたのかは覚えていないけどね」

一気に話して疲れたのか、苦笑した後エリオは深呼吸して息を整えた。

「デスコもつ！ 宿命のライバルである勇者さんと早く会つたいデスつ！」

「それなら、ヴィータたちの中から選んでみたらどうかな」

「えつ？」

微笑みながら言ったミナートの言葉に、ヒリオが反応する。

「？ どうしたんだテスか？ ヒリオちやん」

「ヴィータって……見た目は赤い服を着た女の子のことかな？」

（やつこえぱいのことせ話していなかつたつけ）

ミナートに来る前に会つたヴィータたちについて話した。

「ヴィータさんたちを退けるなんて、君たち本当に強いんだね」

「いやいや、それほどでもテス～」

褒められたテスコは照れながら笑つた。

「でもヴィータさんは

」

と、ヒリオが何かを言いかけた時、扉を叩く音がした。

「……話はいいまでもみたいだね。とりあえずみんなと話すときは僕が言ったこととちやんと口裏を合わせてね」

「わかったテスつー」

「うん。大丈夫だ」

エリオは一回頷いてから入口近くに立つと扉を開けた。

「……エリオ……」

川の近くでフェイトが一人黄昏たそがれていた。

「……いつになつたらお母さんって呼んでくれるのかな……」

それはフェイトにとつては一番重大な悩みだった。

第六話 ただいま情報交換中です。（後書き）

フェイントは親バカ設定です。

では今後も話の内容色々のんびりと進んで行きます。

第七話 やっぱり森林浴は良いね。（前書き）

エリオがいろいろと訊かれ、ミナトは歩き出す。

ただ、それだけです。

第七話 やっぱり森林浴は良いね。

エリオはなのはたちにミナトたちを紹介した。

だがどこの出発などの過去の経歴については一切を語らなかつた。

(本当のことを言つても信じてもらえないだらつて、管理団に余計な情報を与えたくないしね。)

無論、エリオの中には信頼している人たちへ本当のことを言わないことによる良心の呵責かじやくはあつた。

だが

(それはそれ。これはこれ)

といった感じでエリオは幼いことはかけ離れた考え方をするようになつてしまつた。

エリオの話のはやティアナは疑念を抱いたものの証拠が無いので沈黙したままだつた。

「畠さん。よろしくお願いします」

「よろしくデス～！」

それにミナトはおかしながぶり物をしている点以外は普通の少年に見えたこと、デスコは不気味な格好をしていたが話しかけや雰囲気が幼い少女であつたことも手伝つてすぐにその場に打ち解けることが

できた。

わずかに疑惑を残したまま、ミナトとデスコを入れてバーベキューが再開された。

「デスコ～。遊ぼ～っ！」

「はいデス～！」

食後、デスコはヴィヴィオたちと一緒に川へと向かった。

その様子を眺めていたミナトの耳にエリオとなのはたちの話し声が届いた。

「ねえエリオ。あの子たち本当にエリオの友達なの？」

「はい。そうですね～」

「……それじゃあいつ、ビーンで、どんなふうに出会ったのよ」

「ティアナさんは生まれてから今までの全ての全ての友人との出会いについて鮮明に語れますか？」

「……うぐう……うつ、それとこれとは話が違うでしょっ……」

「違いませんよ」

「エリオ……私にも話せないことになの……？」

「……フロイトさんは僕のことを信じてくれないんですね……」

「つー？ そつ、そんなことないよつー！ 私はエリオを信じてるよつー！ うんつー！ エリオは正しつー！」

「いやいやいやー！ フロイトさんどれだけエリオに甘いんですかつー！…」

「ありがとうございます。フロイトさん。なんだか本当のお母さんみたいですね」

「……はうつー！…」

「フロ、フロイトちゃんつー！ ビリじていきなり鼻血をつー？」

「ねえねえエリオー。まだ材料が余っているから早食い勝負しようー」

「わかりました、受けて立ちますよ。スバルさん」

「馬鹿スバルつー！ 今は大人しく黙つてなさいつー！…」

ミナトはそこで聞き耳を立てるのをやめた。

(……思つていた以上にエリオはしたたかだつたんだな)

ミナトは改めてエリオが敵にならなくて良かつたと確信していた。

「さて。僕は僕で閣下や風祭たちの情報を集めないとな」

手がかりは皆無だったがこのままジッとしていても退屈なだけだつ

たため、ミナトは立ち上がりエリオに一聲かけてから森の中へと入つて行つた。

「…………」

森の中を探索中にミナトは後ろを振り返つた。

誰もいないし何もない。

ミナトは前を向くと再び歩き始めた。

（……氣付かれてはいないみたいね）

（ティア～。やつぱりやめよつよ～）

（馬鹿スバルっ！ エリオの話は明らかにおかしいわっ！ もしかしたらエリオは彼に脅されているかもしないわよっ！）

（でも～……）

ミナトの背後にはスバルとティアナがいた。

『オプティックハイド』

術者と術者に接触している対象を不可視の状態にする幻術魔法の一つ。

あの後、エリオと話していたティアナは一人森に向かうミナトを見

てティアナはあとをつけることを決意。

適当にエリオとの話しからスバルと共に抜けだしてこの魔法を使い尾行していたのだ。

エリオは去つていいくティアナたちに何も言わなかつた。

「…………」

ミナトは上を見上げた後、右に方向転換して足を進める。

その後ろに物音を立てない様に静かに慎重についていく一人。

しばらく歩くとまた方向転換。

そしてまた。

（……ティア～……もしかして尾行がバレてるんじゃないかな～…）

（……私もそう思えてきたけど、それなら話しかけるか逃げるかするはずよ。もしかしたら念のために遠回りしているだけかもしれない……）

そしてまたしばらく歩くと。

「お帰り、散歩はどうだった？」

「ただいま。思つたよりも森林浴が楽しめたよ」

元のキャンプ場に辿り着いた。

エリオとミナトの会話にティアナは全力でツッコんだ。

「？あの娘、どうしたの？」

「 わたし ? 」

突然、森の中から姿を現して絶叫したティアナをミナートとエリオは不思議そうに見ていた。

第七話 やっぱり森林浴は良いね。（後書き）

次は旅行が終わった後から始まります。

第八話 審生活の始まり。（前書き）

とつあえず//ナトとテスコはヒリオの住んでいる寮に行くことになつたようです。

第八話 寮生活の始まり。

楽しい旅行から帰ってきた次の日。（ティアナがやけにぐつたりとしていたが）

朝日が顔を出すのとほぼ同時に起きたエリオは早朝訓練に励んでいた。

どれだけの力があろうともそれに振り回されているようでは一人前とは呼べない。

そのためにエリオは日夜努力を惜しまず自分を高めている。

「…………ふう」

七時になつたことをこれまでの経験から判断したエリオはタオルで汗を拭いてから寮の自室へと戻つて行く。

ついでに昨日、住む場所も当てもないので自室に泊めたミナトを起しそうと（デスコは隣人に任せた）考えていたエリオの足が止まつた。

「…………なにこれ」

誰にも向けられていないつぶやきはエリオ自身以外には届くことは無かつた。

その光景を簡単に言つてしまえばきれいすぎる寮だった。

窓も床も壁も。

至るところが鏡のように磨きあげられ太陽光を反射していた。

まさかと思い浴室に戻ったエリオはミナートの寝ていた布団が丁寧に畳まれているのを見て確信した。

「エリオ……？ どうしたのか？」

その時、乱れたパジャマ姿の無防備な隣人が眠そうにしながら扉から顔を見せた。

「ああ、おはようセッテ」

「おはよう……」

セッテも寮の異変に気づいたらしく寝ぼけ眼を見開いて周囲を見回した。

「…………これはいったい…………？」

「見当はついてるけどね」

訝^{いぶか}しるセッテに背を向けてエリオは寮の食堂へ向かって歩き始めた。

「エリオ……？」

「おいでよセッテ。たぶん寮を掃除したのは彼だからさ」

振り向かずに言つたエリオの言葉にセッテは無言で頷き、エリオと

共に食堂へおもむく。

二人が食堂に近づくに連れて良い匂いが漂ってきた。

この寮では完全な自給自足性になつており料理を行う人はセツテがエリオと食事を共にするときに使用するくらいのものであったので、これは異常な事態と言えた。

「「」のみそ汁の匂いは…………」

「食欲をそそる匂いだね」

何故か警戒するセツテと軽口をたたくエリオ。

二人は食堂の扉を開け放ち、調理場へと足を運ぶとそこには

「あつ、おはようエリオ。もうすぐ朝食の準備が終わるからちよつと待つててね」

エリオが予想した通り、黒いブリーフ帽をかぶつている少年が朝食を作つていた。

が

「……なに、その格好」

呆然としながらつぶやくエリオに、割烹着を着たミナトが疑問の声を上げる。

「えつ？ 似合っていないかな……？ 僕はいつも奉仕するときにはこの格好で行うんだけど……」

問われて返答に困ったのはエリオの方だった。

「……似合っていないわけじゃないけど……」「……

割烹着を着て朝食を作るミナトはエリオの皿から見ても絵になっていた。

（だけどなんかおかしい様な気が……）

確証を持つていたわけではないため、エリオはその違和感を直接口に出しはしなかった。

と、会話に参加していなかつたセツテが敵意と共にエリオの前に進み出た。

「セツテ

「おい、お前」

エリオの呼びかけを無視してセツテは鋭い眼差しでミナトを睨みつける。

「んつ？ どうかしましたか？ え～っと……」「

「セツテだ。そんなことよりもお前、今すぐエリオの朝食を作るのをやめろ」

その一言はミナトとエリオに困惑の沈黙をもたらした。

朝食を作るのをやめる。だつたなら一人も意味はわからなくともなんとなく理解できた様な気分にはなれただろう。

だがそこにエリオの、が付いたことによつてミナトは（何かの嫌がらせかな?）と思い、エリオは（最近セツテを怒らせるとどうな?）としたかな……?）と思案した。

「エリオの食事は私が作る、朝だらうが昼だらうが夜だらうが。これは誰にも譲らない」

「ああ、なるほど」

続いたセツテの言葉にミナトは納得の色を示した。

「やつこつことなら一緒に作りませんか? 僕は他の方の朝食を作りますからセツテさんはエリオの朝食を作つてあげてください」

「わかった、それならいい」

言つが早いがセツテはどこから取り出したマイエプロンを装着してミナト共に調理を開始した。

「……うへん……」

ちなみにエリオは一人が料理を行つている最中にも過去を振り返つていた。

「一体何で怒つていいんだね?……? チンクに自作のストラーダ

型腕時計を渡したことかな……？ それともノーヴェにネックレスを作つてあげたこと……？ はたまたルーに手作りのイヤリングをあげたからかな……？ でも全部セツテは知つているはずだし……それとも

「

（思つていた以上にセツテさんは心が広いんだね……）

エリオの発言とセツテの心の広さに驚愕しつつミナトは朝食を作り続けた。

「つたくなんなんだよおつ！」

見知らぬ悪魔に突如強襲された一人の少年は魔法でそれらを撃退した。

その直後、飛来してきた謎の人間たちがわけのわからない口上を述べて襲いかかってきたのだ。

特に先頭にいたボーテールの炎の女剣士の剣幕に漏らしてしまいそうになつた。

「時空管理局だかなんだか知らないが、なんでボクがこんな田に……」

「……」

逃げる所の無いアーティストが輝いていた。

第八話 寮生活の始まり。（後書き）

次回は烈火の将（剣精付き）VSドクロ坊ちゃんの予定です。

第九話 ハミーゼルVSシグナム そのいち（前書き）

ハミーゼルとシグナムの闘いの始まりです。

第九話 HミーゼルVSシグナム そのいち

光輝く太陽の元、明るい森の中を「そ」と動き回る緑色の影が一つ。

「はあ……なんでボクがこんな日に……」

何度もわからぬ溜め息をつきながら足取り重く歩いている少年。

元魔界大統領の息子にして自分の意志で父親を越えようとする死神。

エミーゼルだった。

「お~い、ヴァルバトーゼ、フェンリッヒ、フーカ、デスコ
、アルティナ、ミナト、みんなどこに行っちゃったんだよ~」

先ほど大きな声で探しわつた結果、管理局に見つかってしまったため（実際はその大きな魔力を探知されたことによって見つかったのだが）ささやく様な小さな声で呼びかける。

「ちくしょ~……ボクが一体何をしたって言つんだよ~……」

自分一人しかいない上に追い回されているからか、いつも以上に気弱になってしまっているエミーゼル。

精神的な疲れから足を止めて見覚えのない景色を見回す。

その行動のおかげで上空から飛来する火炎弾が命中しなかった。

「うひやあつ！？」

だが、突如目の前に炎の塊とつじょが落ちてきたのを見てエミーゼルはその場に尻もちをついてしまった。

「ちつ！ 外したかつ！」

「先走り過ぎだぞ、アキト」

先ほど聞いたばかりの闇を覚えたある声にヒリーセルは全身を震わせながら振り向く。

「……………」

そこにはエミーゼルの予想した通りポーテールの炎を纏つた剣士
烈火の将シグナムと相棒である烈火の剣精アギトの姿があ
つた。

貴様にいくつか訊きたいことがある」

怯えているヒミーゼルの様子などお構いなしに（あるいは単に怯えていることに気付いていないだけか）シグナムは命令口調で質問をあび
開始する。

「何の目的でこの世界に転移してきた、正直に答える」

「いつ、一休何のことがおへり？」

震えながら問い合わせるエミーゼルにシグナムは冷笑で応じる。

「ふつ、怖がつてゐるふりをしたところでその体から出る強大な魔力を隠しきれるものではないぞ」

本気でビクッているエミーゼルをシグナムは自分に都合の良い様に解釈する。

だが一概にシグナムを責めることはできない。

事実、エミーゼルは強大な魔力を持つてゐる上に数々の死闘をぐぐり抜け、気弱だが立派な悪魔へと成長した。

そのため怯えながらでも体は本人の意思とは無関係に臨戦態勢を取つてしまい、それゆえにシグナムは怯えた振りだと判断した。

「話すつもりが無いのなら……拘束した後にゆつくりと話を聞かせてもらおうつ！」

シグナムはレヴァンティンを構え、エミーゼルへと空を疾走する。

「うひやあわあつ！ くつ、来るなあつ！！」

エミーゼルは持っていた杖をシグナムへと向ける。

瞬間、杖に魔力が集中し炎が噴き出た。

「なにつ！？」

エミーゼルが自分と同じ炎使い（だとシグナムは思った）とは思つてもみなかつたシグナムは驚愕するが

「だがこの程度

炎にそれほど^{とうかん}の魔力^{まのぢゆ}が込められていないことを瞬時に見切り、そのまま炎の中へ突貫する。

卷之三

レヴァンティンで炎を薙ぎ払つたシグナムは勢いを更に強めてエミー
ゼルへ

「来るなって

肉薄しようとした時、ストレスの限界を超えたヒー・ゼルの中で何
ハゲコム。

「……………」

二
なつ

杖の中から噴き出した炎は先ほどとは比較にならない熱量を誇り、同時に

「召喚魔法だとおつ！？」

驚愕の声を上げたのは後方にいたアギト。

もつとも炎の魔法の中から巨大な人影が出現すれば誰だろうと驚く
ものだが。

店長、と書かれた帽子をかぶつた瞳に炎を宿した巨人の手の平から
生じた炎がシグナムを飲み込み

「くつ
」

「シグナムッ！？」

そのまま森の一部を炭化させた。

一瞬で広範囲の木々を炭化させた炎は、熱血店長の燃える闘魂の証とうこん
と言えよ。

やがて熱血店長が消えるとそこには灰となつた森とヒミーゼル、そ
して

「……危ないといひだつた」

先ほどまではまったく違つ姿のシグナムだけが残された。

「……ん～……」

エリオから渡されたお金で夕飯の買い物に来ていたナートは品物
の値段と質を見比べていた。

字は読めないが幸いなことに数字は変わらないので値段はわかる。

後は経験と直感でどう買ふ物するのが一番安く済ませられるかを考
えるだけ。

もちろん栄養のバランスとおいしさも考えて献立を作らなければな
らない。

「……やっぱり今日はサラダ中心が良いかな……」

完全に順応しているミナトがHミーゼルの危機に気が付くはずもな
かつた……

第九話 Hミーゼル VS シグナム そのいち（後書き）

シャレにならない威力を誇るHミーゼルの魔法。

次回はどうなるでしょうか…

第十話 シグナム∨SHII一セルモーイ(前書き)

両者互角? の戦いです。

第十話 シグナム∨SHII-ゼルその一

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

息を荒くしているHII-ゼルは別の意味で焦っていた。

恐怖に駆られて森の一部を焦土にして、襲ってきた相手を灰にしてしまった。

冷静に考えれば襲つてきた相手を捕まえていろいろな話を聞いた方が仲間たちの居場所がわかつたはずなのに。

「うう……ボクってやつぱりまだまだだ……」

頭を抱えて自己嫌悪に陥るHII-ゼル。

「まさかこれほどの魔力を持つていたとはな……」

「え…………つー?」

空から届いた声にHII-ゼルは上を見上げた。

そこには髪の色が変わり炎の翼を生やしたシグナムがいた。

「お前がもし冷静に狙いを定めていたならば、今の一撃で私は燃え死きていただろう」

『だから今度はあたしらも全力で行かせてもらひや』

「えつ？ えつ！？ なんだそれ！？ 魔チエンジのかつ！？
それとも怒ツ キングつ！？」

初めて見るユービンに慌てふためくヒーベル。

「行くぞ、アギト」

『おうつー』

だがシグナムはそれを油断を誘つための道化芝居と判断し、左手に炎の剣を纏わせて振りかぶる。

「剣閃烈火つ！」

『火龍一閃つ！』

炎はその猛り^{たけ}を増していき空間を焼き切る刃と化す。

シグナムの動きに合わせたアギトの叫び。

振るわれた左手より発する炎がその空間の全ての敵を難^がき払い殲滅^{せんめつ}する。

非殺傷、といえど手加減なしの一撃を食らえばヒーベルも意識を保つことは不可能。

もつとも、非殺傷設定など知らないヒーベルにとってその炎の刃は死へ誘^{じよ}う一撃にしか見えない。

ヒーベルは那一撃を食らうまでの間に走馬灯が走っていた。

父親の威厳を盾に好き勝手やつていた日々。

自分自身の力で歩いて行くことを決めた時。

初めて魂を刈り取った瞬間。

アクターレ（〃アホ）を魔界大統領の座から引きずり降ろし黒歴史として永久に封印すること。

（そうだ、ボケは」なんと」るで死ぬわけにはいかないんだー！）

炎の方はもう田前まで来ていた

一瞬の間に駆け巡った思い。

その全てを訳もわからないこんな世界で無駄にすること。

それだけは

1

二二二

叫ぶヒミーゼルの姿が黒い何かに包まれたかと思つとその姿が変化した。

否、変化と言つてゐるが、生ぬることのではなくまつたく別の存在となつた。

道化師の様にも見える絶大な魔力を持つた巨大な死神。

シグナムの最強の一撃を回転する巨大な鎌で受け止め、拮抗した力で耐えている。

「面白いつ！」

その異形の姿を見てシグナムは恐怖するどころか喜びに満ち溢れた顔をしていた。

周りからバトルマニアと言われようともシグナムにとって強敵と戦うことは至高の快楽。

例え相手が異形の怪物であれともそれは変わらない。

「はあああああああつ！－！」

左手に力を集中する。

例え力が拮抗していようとも気迫でそれを打ち破つて見せる。

単純すぎる精神論だったが徐々にエミーゼルが押され始めた。

（いけるつ－）

『いけるぜつ－！』

シグナムとアギトが勝利のために更なる力を込めた時。

ヒーラーの前方に三色の魔法陣が展開され、炎、氷、風の三属性の荒れ狂う魔法の渦がシグナムを飲みこまんと向かつてきました。

普通ならば誰もが逃げ出す。

この状況下では相打ち必須、だが敵は謎の次元犯罪者。

こちらは非殺傷設定となつており敵は氣を失うだけだが相手は恐らく殺傷設定。

互いに互いを仕留める一撃を放つたのならば死ぬのはこちらだけ。

勝負と言つてはあまりにも理不尽な戦い。

だがシグナムは攻撃を回避する「ことなど頭に無かつた。

あるのはただ一つ、全力で強者を倒す「ことのみ

「はあああああああああああつ！……」

空中で一歩前進し、左手を振り抜いたシグナムが三種の魔法に飲み込まれた瞬間。

爆音だけがその場を支配した。

買い物を終え、寮に帰つたミナトは真つ先にテスロの元に行つた。

「テスロ、出掛けるよ」

「うわあつー？ いきなりビラしたんテスかつー ミナトついたん
つー」

「これでよし」

ミナトは答えずに買つてきた物を整理すると紙に何かを書き始める。
ミナトは答へずて買つてきました物を整理すると紙に何かを書き始める。

ミナトは答へずて買つて買つてきました物を整理すると紙に何かを書き始める。

「ミナトついたんテスかつー いつたいビラしたつてこうんテスかつー？」

「ううとね、気になることがあるから一緒に来て」

ミナトはそれだけ告げると足早に寮を後にした。

第十話 シグナム∨SHILL-セルその一（後書き）

何かに勘付いたミナト。

第十一話 シグナム発見（前書き）

ミナトが主人公なのにエリオがメインな感じです。

第十一話 シグナム発見

「セッテ。シグナムさんたちはあつちに行つたんだね？」

「間違いない」

仕事に空きができたエリオとセッテはシグナムが次元犯罪者を発見、追跡中との報告を受けたので暇つぶしに覗きに来ていた。

セッテはともかく、エリオは飛行魔法を使えないため改造バイクを走らせていた。

もともとティアナが使つていたバイクだが新しいのを買つたのでいらなくなつたとエリオが譲り受けたものであり、エリオが自分で改造して様々な機能を搭載した違法バイクに造り替えたのだがそれはまた別の話。

現在はエリオが運転しているバイクにセッテが後ろから抱きついている状態となつている。

「僕はその次元犯罪者はたぶんミナトたちの知り合いだと思つけど、セッテはどう思つ？」

「どうでもいい」

そつけない態度にエリオは苦笑する。

パートナーになつてからしばらく経つがセッテは自分が興味関心を抱いたこと以外に関してはとことん無関心を貫いている。

（もつといろいろなことに興味を持つた方が人生を楽しめると思つ
けどなあ……）

セツテは小言を聞くと微妙に不機嫌になるのがわかっているのでエリオは心の中に思うだけで何も言わない。

「見えてきた」

「……わあ～……」

セツテが言う前にエリオも視認していた。

燃え尽き灰となつた森の一部を。

「これは非道いな……」

近くにバイクを停車させてエリオは原形を留めずに完全なる焦土となつた森へ足を踏み入れる。

背中にセツテが抱きついたまま。

「……セツテ、離れて」

「嫌だ」

それ以上は何を言つても無駄だと察したエリオはそのままの状態で焦土の調査を始める。

焼け焦げた後にはかすかだが魔力の残滓ざんしが残つてゐる。

(シグナムさんがやつたのかな……?)

烈火の将の異名を持つシグナムの火力ならば森を焦土に変える」と
くらいはわけがない。

(だけど意味も無くシグナムさんが森を燃やすとは考えにくくし…
…)

疑問を抱えたままエリオ更に調査を進める。

燃え尽きた木々からは魔力の残滓以外の情報を得ることはできそう
にないので、今度は周りに何か落ちていないかを確認する。

「エリオ、あれはなんだ?」

セツテがある一点を指差す。

エリオの視線がセツテの指の先を追つてみると、灰の土の中に入
様な物体が埋まっている。

「大変だ。急いで助けないと」

慌てて埋まっている人の元へ駆け出すエリオ。

灰を掘り返してみると緑色の服を着た子供が徐々に姿を現し始める。

「大丈夫ですか、生きていますか?」

「……うう……」

エリオが声を掛けでみるとかすかなかつめき声が返ってきた。

（かなり衰弱しているようだが何とか生きているみたいだ）

急いで子供を抱き上げたエリオは子供をセツテに渡す。

「セツテ、この子を本部に連れて行つて治療をしてあげて」

「ん。わかつた」

短く頷いたセツテは来た道を逆方向へ高速で飛んで行つた。

一人残されたエリオはシグナムとアギトの搜索を続けながら思考する。

（やつれの子供……偶然この場にいたとは考えにくく、……とするとたぶん彼はミナトの ）

「……う……」

思考にふけりながらもその耳はあまりにも小さく傳いその声を聞き逃しはしなかつた。

「シグナムさんつー、聞こえていいのなら返事をしてくださーつー」

耳に届いたその声の正確な位置を把握するためにエリオは大きく声を張り上げた。

「……エリオ……」

小さな小さな細い声からエリオはシグナムの位置を捉え、そこに急行する。

シグナムが倒れたいたのは焦土の森から少し離れた茂しげみの中。

無残に裂かれたバリアジャケットに砕けたレヴァンティン、隣には気を失っているアギトがいた。

アギトは比較的軽傷だが、シグナムはいつ意識を失つてもおかしくは無い。いや、むしろいつ死んでもおかしくないと言えるほどの重症だった。

「少し待つていてください。今運びますから、意識を強く持つてください!」

「…………あ…………」

強く呼びかけるエリオだったが、シグナムは咽喉を焼かれほとんど声が出せない。

(どうする……今すぐ治療しないと持ちこたえられない危険が高い)

回復魔法の使えないエリオに残された選択肢は一つ。

一つは一人を抱えて全速力で本部に戻ること。

だがこれは魔力である程度緩和されるといえど、シグナムがエリオのスピードに耐えられる保証は無い。

もう一つはエリオ一人で本部まで戻り、医療班を連れて再度ここに戻ってくること。

こちらの選択は単純計算で先ほどの選択の一倍の時間がかかるという欠点がある。

どちらにするべきか

「……迷っている時間は無いな」

エリオは数瞬考えた後に、一人を連れて本部まで戻る選択を選んだ。

「ちょっと待つてほしいな」

「つー?」

今まさにリミッターを外して駆け出そうとしたエリオは急に掛けられた声に硬直した。

「治療だつたら僕にもできるから」

「ミナート……」

「大丈夫デスよつー ミナトっちゃんは嘘を言つたりはしないデス

からつー』

「…………」

当たり前の様に姿を現したミナトと『テス』に多少の警戒心を抱きながらも素直にシグナムたちを地面に下ろした。

第十一話 シグナム発見（後書き）

のんびりとしたペースで続いて行きます。

第十一話 シグナム治療（前書き）

流石は暴君の使い魔……治療が拷問にしか見えない……

第十一話 シグナム治療

重傷を負っているシグナムと軽傷のアギトを横に寝かせた後、ミナトはその身体を一通り調べて、意識の有無を確認する。

「ミナトの人 ええつと？」

「シグナムさんだよ。“烈火の将”シグナム。僕も昔、戦い方を教えてもらったことがある先生みたいな人だよ。」

「そう、それでこのシグナムさんだけど

ミナトは至極真面目な顔で。

「甘いお菓子が食べられない、とかはないよね。」

素つ頼狂なことをヒリオへ尋ねた。

「……あ～……うん。確かに好き嫌いは無かつたと思つけど……」

戸惑いながらも自身の記憶をたどりて答えるヒリオ。

「ミナトっちゃん？ そんなことを聞いてどうするつもりなんデスか？」

問いただしたのは「テス」。

その言葉を聞いたエリオは治療方法を聞いていないのにどうしたさつきあれほど自信満々にミナトを信じてなんて言えたのか疑問を抱

くも心中で黙殺した。

「あつともともな答えなど返つてこない。

「テスコのマートへの信頼は理由ではなく精神論の問題だ。

共感はできないものの理解はできなくもない。

「もちろん、これを残さずに食べてもいいだよ」

「う」リ笑つて携帯袋の中から取り出したるは

「……エクレア？」

ショーカリームのバリエーションの一つで細長く焼いたシューにカスタードクリームなどを挟み、上からショコラートを掛けた一口サイズの洋菓子。

甘くておいしいからエリオも結構好きなお菓子なのだが

「……それを今ここで取つ出したのには何か理由があるの？」

「もちろん。この状況でボケられるほど僕の神経は図太くなつよ

頭痛がしてきたので頭を手で押さえるエリオを尻田にマートはエクレアをシグナムの口に無理やりねじ込もうとする。

しかしながら思つよつては口を開かせられず、エクレアを食べさせることができない。

「デスコ、シグナムさんの口を開かせて」

「はいデスッ！」

「デスコはその小さな両手を使って強引にシグナムの口を皿一杯開かせる。

開ききった口の中にエクレアを詰め込むミナト。

この光景を見て治療風景だとわかつた人がいるのなら眼科か精神科に行くことをお勧めする。

第三者であるエリオは、もしかしなくてもお菓子を使った殺人事件の現場に居合わせているんじゃないだろうかと考えていた。

「よし、入りきった。デスコ、モシモシ呟

「わかつたデスッ！」

頭と頸あいを掴んで良く噛ませるデスコ。

細かく噛み碎けたと判断したミナトは携帯袋の中から今度は飲料水を取り出し、シグナムの口の中に流し込む。

「ぐぼふあつ！？」

意識が無くとも苦しさから飲料水を吐き出しあうになるシグナムの口を押さえつけ更に大量の飲料水を投入する。

「とにかく飲み込んでください」

「飲む込む『テス』よ～」

寝たきりの老人をいじめる鬼嫁の所業を思い浮かべるエリオ。

（治療。今日の前で行われているのは治療なんだ）

と皿皿暗示を掛けること皿分を納得させようとしていた。

「む…むぐうつー?」

飲料水を流し込まれ無理やり口を動かされてはシグナムも口に含んだエクレアを咽喉の奥へ通すしかない。

口内に広がるクリームの甘さは普段のシグナムならかすかな笑みを浮かべて食べただろうが今は単なる拷問道具にしか思えない。

やがて全てを咽喉の奥へ流し込むと

変化が起つた。

「つー?」

「なんだ? これは……」

シグナムの身体が光に包まれ、みるみるうちに傷が塞がつて行く。

体中を蝕んでいた苦痛は傷口と共に消え去つて行き十秒もしない間にシグナムの傷は完全に癒えていた。

「気分はどうですか?」

ミナトはシグナムの顔色をうかがいながら確認のために尋ねた。

「あ、ああ。問題ない。むしろ調子が良くなつたほどだ」

シグナムは念のために立ち上がりつてみると、やはり痛みはまつたくない。

「す、いな……、これほどの回復魔法を使えるとは……エリオ、彼らは新メンバーか？」

「客人です」

驚嘆の声でエリオに訊いてみるとエリオは一時の間もおかずに即答した。

「？　客だと……」

「はい」

エリオの態度に訝しむシグナムだつたが追及しても望んだ答えは返つてこないとエリオの雰囲気から判断できた。

「せうか……いづれにしろ世話になつた。私は

「

「あつ、自己紹介はしなくても大丈夫です。エリオから大体は聞きましたから」

「むつ……そつか……」

名乗れないことに不満を覚えながらもシグナムは口を噤む。

エリオはシグナムが助かったことに心から安堵すると同時に。

エクレアなどで瀕死だったシグナムの傷を治療したミナトとテスロ
に対して改めて戦慄を覚えるのだった。

「大丈夫だよ、エリオ」

エリオの表情から何かを察したミナトはエリオに耳打ちする。

「心配しなくても、毒は入っていないしやばい薬を使っているわけ
でもない。強いて言うなら
」

ミナトは苦笑しながら。

「地獄で作られたお菓子だからかな」

不安全開の言葉を囁くのであった。

第十一話 シグナム治療（後書き）

なんとも不安にさせむ一皿をこつたミニナトでした。

第十二話 ふうん、やうなんだ。（前書き）

シグナム復活。

第十二話 ふうん、そうなんだ。

「そうだエリオ！　ここにいた次元犯罪者はどこにいったー？」

唐突に焦ったシグナムの大きな声に「テス」はビクッと震えた。

「なつ、なんデスか！　敵デスか！？」

あわてふためく「テス」と壊れたレヴァンティンを構えながら周囲を警戒するシグナム。

慌ただしい二人とは対照的にミナトとエリオは静寂に包まれている
エリオはシグナムが探している人物がこの場にいないことを知つて
おり、ミナトはエミーゼルのことを知らないもののシグナムと戦つ
たのが仲間の誰かだということを推察していたからだ。

「アギトッ！　起きる！」

「う……ううん……」

「シグナムさん、大丈夫ですよ」

アギトを叩き起こしユーバンしようとシグナムを落ちつけようとエリオが話しかける。

だがシグナムはそんなエリオのやつたりとした態度が気に入らなかつたらしく

「何を言つてゐる！ エリオ！ 敵がどこに潜んでゐるのかもわからぬんだぞ！ あれほどの使い手……皆に牙を向けたなら相当な惨事を引き起しこすことになるぞ！」

（まあ 実際、みんなの内誰かが街中で暴走でもしたらシャレにもならぬだろ？しね……）

シグナムの慌てようは間違つていないと心の中で肯定する//ナード。

「落ち着いてください。いくら相手が次元犯罪者だったとしても無意味に破壊活動を行うと決めつけてはいけませんよ」

エリオの言葉はある意味正論だったが、実際にエリー・ゼルと闘い瀕死になつたシグナムは頭に血が昇つており

「そんな悠長なことを言つてはいる暇などない！―― ハリオ！ 今すぐここにいた奴を追え！ それと管理局に応援を要請するんだ！」

まったく耳を貸そつとはしなかつた。

「だから落ちついてくださいシグナムさん。いくら脳筋戦闘中毒者
といつても仮にも騎士でしょうか？」

「む……むう？」なにかいま物凄いことを言われた様な……？」

エリオはエリオで毒を吐いていたがシグナムは気付かない。

「それよりも戻りましょうシグナムさん。部隊の人たちやはやてさんたちも心配していますよ」

「だ、だがしかし」

なおを食い下がろうとするシグナムに

「これ以上ガタガタぬかすなら僕が貴女を半殺しにして上げても良いんですよ?」

笑顔で、しかし言葉には一切の感情を込めずに言い放つた。

「……っ! そう、だな……すまなかつた。エリオ……」

「いえいえ、誰にでも頭に血が昇つて冷静な判断ができなくなる時がありますから。お気になさらないでください」

「……ああ」

微笑むエリオと消沈するシグナム。

そんな一人の様子を横から見ていたミナトとテスコは。

「……エリオっちゃん、なんだかす"ぐ"怖い気がするテスよ……」

「奇遇だね、『テス』。僕もエリオは僕以上に悪魔に見えるよ」

爽やかな笑顔を浮かべるエリオに一人は戦慄を隠せなかつた。

「では戻りましょうか、皆さん」

その場にエリオの言葉に反対する者はいなかつた。

「遅い」

「非道いなセツテ。これでもかなり急いで戻ってきたんだよ」

本隊と合流したミナートたちを待つていたのはセツテのそんな言葉だつた。

「それでセツテ。やつて救助した子供はこまどりにいるの?」

「医務室で横になっている」

シグナムこまどりは聞こえない様に声を潜めて尋ねるエリオ。

「そつか……それじゃあどうにかしてシグナムさんとは会わせない様にしないと……」

「? なぜ?」

「いろいろと事情があるんだよ」

「そつか」

明らかに誤魔化しているだけのエリオをセツテが問い合わせないのは単純に興味がないから。

「でも救助したのが女の子だったりしつこく問い合わせるんだろうね……」

エリオとセッテの様子から何となく察するミナト。

「？？？どういうことデスか？」

デスコは意味がわからず困惑中。

簡単に詰うとねテス^ト。そこにテウがある^トで^シとを^シ」

瞳を輝かせるテスカ」ミナトは微笑みながら頷いた。

シケナムさん、「アキトは僕が医務室まで連れて行きますから、シケナムさんは今回の件を先に報告しておいてください」

「ん？」
「ああ、わかった。エリオ、よろしく頼むぞ！」

眠っているアキエをエリオへ手渡した後、報告のために歩き出すシグナムを見送るミナートたち。

「それで、とりあえずこれでしょりくはシグナムさんが暴れるのを防ぐことができたわけだけど

「エリオ、もしかしてあのシグナムさんって人のこと嫌いなの？」

毒舌ばかり口にするエリオに不安を覚えたミナトが尋ねてみる。

「まさか。僕にとつてシグナムさんは尊敬すべき師匠であり越える

べき目標の一つで、からかうと楽しい人だと思つてゐるよ。
……ちょっとだけウザいと思う時もあるけど」

本心から言つてることがわかつたミナトはそれ以上何も言わずに失笑するだけだった。

「ああ、それともう一つ付け加えておくと

」

「？」

「シグナムさんは僕から見ても女性的な魅力に溢れる可愛らしい人だとも思つてゐるよ」

疑問符を浮かべるミナトにエリオはその一言を付け足した。

第十二話 ふうん、やつなんだ。（後書き）

「これもうヒロオ君じゃないですね……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7238u/>

次元戦記ディスガイア 暴君の使い魔と並行次元の旅

2011年11月27日14時53分発行